

---

# The・マリオ&カービィ ～協力プレイ～

ワオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The・マリオ&カービィ ～協力プレイ～

### 【Nコード】

N3499M

### 【作者名】

ワオン

### 【あらすじ】

のんびりポカポカ平和のキノコ王国のお城の近くの家。

そう、何度も何度も何度もさらわれたピーチ姫を助けた英雄マリオの家。

その家に、キノコ王国の重役キノじいから手紙が来た。

「なにやら突然、大きな謎の土管が現れた。調査してほしい」と・・・。

キノじいは、ピーチ姫にも信頼されている人なので断れず調査に向かうマリオ。

しかし、どこをどう調べたらいいのかわからないのでおそるおそる  
中へ・・・。

するとそこはププランドだった!?

## 1：マリオ ワープのストーリーは手紙から始まる

また、いつもと変わらない・・・はずの朝がやってきた。

ピーチのすむお城から歩いて五分あたりのところ・・・。

一見普通の家が、ぽつんと寂しそうに建っている。

周りの塀の入り口の表札には『マリオ&ルイーダ』の文字。

その中で、パジャマ姿でナイトキャップをかぶったヒゲをはやした人・・・

マリオがベットから這い出る。

「ふあああああああ・・・ねむい・・・」

3

「ちょっと兄さん！少しは朝ご飯作るの手伝ってよ！」

キッチンの方から聞こえる吠える声。マリオの弟の同じくひげをはやしたルイーダである。

「なんだよなんだよ。ルイーダは酷いなあ。朝起きたばっかりなんだから

そんな荒く扱わなくても・・・」

「兄さんが早く起きないのが、悪・い・ん・で・しょ！」

マリオの苦し紛れのいい訳はルイーダの怒号によって吹き飛ばされる。

「そろそろ家の食材がつきてきたからね。ちゃんと今日買い出しに出かけてよ。」

「あゝ。めんどくせ……あー……。わかつたわかつたら！」

危ないからそれおろせ！」

マリオの愚痴は、怖い形相でお玉を振り上げ構えているルイーダを見て中断した。  
ため息をつくマリオ。

「わかつたんなら早く着替えて、朝ご飯食べて、準備して！」

「はいはい。」

弟にせかされて支度を始めるマリオ。と、そのとき。

ギンコーン！ ギンコーン！

古びたチャイムが鳴り、兄弟二人がコンマ数秒も狂わずにびくつと  
する。

こつこつと音がさすが血がつながっているなど感じる時だ。

「兄さん！ちょっとでてきて！」

「はあ？なんで俺が？」

即座に文句を言うマリオ。だが、

「朝食作る？」

というルイージの一言により、仏頂面で玄関に向かうマリオ。

ドアを開けると、緑ノコノコが現れて頭を下げる。

クッパ軍団との戦いが終わってから沢山の手下が解雇されたのだろ  
う。

クリボーやノコノコなどの雑魚キャラをみるのも珍しくなくなった。

「マリオ様ですね。キノコ王国女王ピーチ姫側近のキノじいからの  
お手紙です。」

「え！？キノじいから？」

マリオが不思議そうな声を出す。緑ノコノコは封筒を渡すとまた礼をして帰っていく。

マリオが不思議がるのも無理は無い。

助け出したピーチ姫が手紙やビデオレター（飛び出し式）を送ってくる事は

まれにあるが、姫に信頼されている重役のキノじい自身が手紙を送ってくる事は無かった。

マリオも何回か会った事があるが、挨拶だけをして、あとはせつせと身の回りの

世話をする人だった。（マリオ曰く「まさに忠実な部下」）  
マリオはドアを閉めるとルイージを呼ぶ。

「おい。ルイージちょっと来いよ。」

「どうしたの？兄さん。手紙でも来たの？」

作り終わったベーゴンエッグをテーブルに載せ、聞くルイージ。

「お前勘鋭いな。手紙は手紙だけどさ……。キノじいからなんだよ。」

「え？あのキノじいが？」

ベーゴンエッグを口に入れようとしていたルイージの手が止まる。

「そつなのよ。ほらこれこれ。」

マリオが机の上に封筒を置く。封筒には「キノじいからマリオ様へ」の文字。

「ふーん。あのキノじいがねえ……。何送ってきたんだろ？」

「見ねえとわかんねえだろ。さあ、あけるぞ」

マリオがあけた手紙。それにはこう書かれていた。

---

拝啓 マリオ様へ

このような手紙を突然送りつけてきた事に、マリオ様は少し不信感を抱いているかも知れませぬ。

なにしろ、私のことを覚えているかどうかもわかりませぬ。

私は執事という仕事をしておりますので記憶力は自信があります。なので、事がおきたときにあなたの事がフツと思いついたのです。では、その『事』をご説明します。

ここからは長くなりますので、時間があるときにお読みいただければと存じます。

事の始まりは城の裏に一夜にして現れた人二人分ぐらいの大きな「土管」でした

しかし、土管ならそう驚く事はありません。

地下の下水道につながる土管かもしれませぬし、



または、他の国へ続くワープ土管という事も考えられます。そんな土管なんて飽きるほどのキノコ王国にはありません。しかし、ここは城の敷地内。ここに土管を設置するには申請が必要なのです。

だが、一夜にして現れたのにそんな申し出は伝わっていない。これは法に違反しているので直ちに近くの土管業者を取り調べさせました。

私も、すぐ見つかると思えば楽観的な気持ちでいたのです。だが……。どれだけ調べても犯人は見つからない。怪しいやつさえ出ていない。不審に思った私は国中を調べ回すよう命令しました。

通常土管業者・・・ワープ土管業者・・・その数ざっと  
8000人ぐらいでしたでしょうか……。

とにかく調べ回しても、まるで風をつかもうとしているかのように手がかり一つつかめません。

最初の方こそ姫も心配していなかったようですが、さすがにこれだけの事をしていれば姫が不安になってくるものしょうがないと感じてきました。

これ以上姫を心配させてはならない。かといっていい方法も見つからない。

それで頭を悩ませていた私は、思いつきました。姫を危機から救ってくれたあの英雄……。

そう、マリオ様の事です。お聞きになると、あなた様は配管工のお仕事もなされていたようですね。

それを思い出し、わたしは、霧が晴れて来たように感じてきました。善は急げ。この言葉に習い、今私はこうして手紙を書いているという訳です。

そこで、あなたにお頼みしたいのです。城の裏のあの土管。

あの土管の正体を見破っていただきたいのです。

私はこれ以上姫を不安にさせたくないので。  
私もお手伝いしたいのですが、姫がいます。  
姫は、私がいらないといつもうるたえてしまいます。  
なので24時間365日手が離せないのです。  
お役に立てなくて申し訳ございません。  
封筒に地図を添付しました。  
それで土管の場所を見つけ、調査してほしいのです。  
ご迷惑をおかけしまして本当に申し訳ございません。  
それでは、報告を心よりお待ちしております。

じいより

キノ

1：マリオ 出発（前書き）

いちいち遅くてすみません。…

めんどくさがりやなものでおぼろおぼろと書いて書いじやうにな  
主をゆるしてください + + +

## 1：マリオ 出発

マリオの家。

キノじいからの手紙を読んだマリオとルイージはしばらくぼんやり状態。

手紙を読みながら食べ終わったベーゴングエッグの皿にはえが止まっている。

しばらくの沈黙の後、マリオが口を開く。

「これは……。どういう意味だ？」

「そんなのわかりきった事でしょ。キノじいが、謎の土管の正体を兄さんにみやぶってもらいたいんじゃないの？」

一番まともで、頭のいいルイージが言う。

「いや、そんな事くらいはわかるんだが配管工の事をつなげる意味もわからんし

第一どうやって調べればいいんだ？」

まあ、たしかにマリオのいうことにはすじがとおっている。

地面からつきでている緑の筒を調べるといわれても誰でもこまるにちがいない。

「うーん。ぼくが思うに……」

ルイージが腕を組む。そして……ぼそりと言う。

「やっぱり中に入るしかないかな……」

それを聞いたマリオは首の後ろをガシガシとかいてから不満そうに言う。

「ったく、やっぱりそう考えるか。」

しかしなあ、そんな仕事わざわざ俺がやらなくてもいいんじゃないのか。

キノじいには自由になるキノピオたちが沢山いるんだろ。そいつらにやらさりゃいいじゃないか。」

「でも兄さん、キノピオ族ってとっても臆病なんだよ。」

前に姫がいつてたけど一応城にも兵はいるんだけど

みんな怖がっちゃってすぐ姫はさらわれちゃってるんだって。」

そういえばそうだ。ピーチ姫は毎回のようにさらわれるので

(前にマリオが32回まで計測しているがめんどくさいのでやめた。)

あるキノピオがクツパが姫をさらう時間をはかったところ、大体3分程度と聞いた事はある。

広い城にしてはかなり速いタイムである。とても兵がいるとはおもえない。

「まあ、しょうがないか……。」

顔ではあきらかにいやという表情が浮かんでいるが一応うなずいている。

そしてさっそく準備をととのえる。

服の至る所に昔使っていたもの。マントはねやスーパー木の葉。

メタル帽子やすけすけ帽子。

ポンプも持ってこうとしたが、重いのと、別に戦いにいく訳ではないとわかっておろす。

そのたもろもろの準備を整えると、ルイージに言う。

「じゃ、いつてくる。いつ帰ってくるかは不定。すぐかもしれないし、または何週間かかるかも。」

ふとん、ちゃんとほしとけ。あと毎日窓を開けて換気。電気を無駄に使わない事。ゴキブリ退治の『粘着テープの家』が切れてきたから買っておく事。OK?」

いいたいことだけこまごまと言うマリオ。こんなことがあるたびルイージはなぜピーチ姫がなかなか正式な結婚に踏み切らない理由がわかった気がするのだ。

「大丈夫。まかせといて。」

あいまいな笑みをうかべて答えるルイージ。マリオはふだん、布団を干す事も、窓を開ける換気も、電気の節約も、『粘着テープの家』を買う事も、全部ルイージに押し付ける。だから、いちいちいわれなくてもOKなのだ。

マリオはうなずくとドアを開けて大きく手を振り上げながらでていく。

(一瞬、ドアに手がぶつかりそうになった)

ドアが閉まる。ひとりになったルイージは大きく伸びをしてソファーにねっ転がる。

(大きな土管・・・ねえ。まあ、たしかにクツパとかワリオとかはこんな小賢しいまねは

しないとおもうけどな・・・。そうだ、そういえば食材が切らし

てたっけ。

今日の夕食何にしようかな・・・？もう夏だから冷たいものにしようかな・・・？

ああ、でもそういや最近カレーとか作って無いじゃん。あれ、うまいんだよな。食材選びも楽しいし。

それに今日はにんじんとか肉とかのセールじゃなかったっけ。前にチラシでみたような気がする。(

よし。とこころのつぶやきで決意を決めると立ち上がってルイージ愛用のお買い物バスケットをとりだす。

これによりレジ袋は不要。エコにつながるのだ。

(少なくとも今日1日は兄さんはいない。思いっきり羽を伸ばすか！)

ルイージは笑みをうかべると楽しそうに家から出る。ここでドアを手につける。

手をフーフーしながら、それでも楽しそうにルイージは駆け出す。

ボタンと、ドアが閉まった。

そのころ、マリオはキノコ城に到着していた。

窓から、キノピオたちがいそがしそうに走り回っている。

ここでマリオは地図を見るが、道が良くわからない。

何しろ城も広いが庭は広い上に複雑。その上方向も歌も音痴なマリオだ。

頭を抱えて悩んでるとふいにキノコ城の玄関があき、キノじいが現れた。しかし、めずらしく一人だ。

「おや、マリオ殿ですか。」

一瞬ビクツとしていたマリオとちがい落ちついた足取りでやっている。

「あれ？手紙じゃ、いそがしくてしょうがないとかいってなかったっけ。」

マリオが首をひねる。それに対し、キノじいが対応する。

「はい。そのはずだったんですが、いきなりワリオ様がおしかけ『姫にあわせる』と言ってきたもので・・・」



「わ、ワリオ!？」

マリオは驚く。ずっと前にコテンパンにマリオにやられたはずなのになぜいまさら姫の元へ……。

「白いスーツ姿に花束を持っておりましたので、きっとデートか結婚のお誘いでございましたよう。」

淡々と答えるキノじい。ワリオのセンスの無さとキノじいの落ち着きぶりに対し、感嘆のため息をつく。

「それで、マリオ殿は土管の場所はお分かりですか？」

ぴたりと今の問題を止められ、少し戸惑うマリオ。  
するとキノじいは、一礼して案内を始める。

「こちらです。」

そして、二人は土管の前についた。  
たしかに、見た目はただの緑色のでかい土管にしかみえない。  
マリオは中を覗き込む。

見えるのは一面黒。底なし沼の用な感じだ。  
これ以外特に手がかりがない。となるとやはり……。

「中にお入りになられるのですか……？」

言ったのは思考を読み取る事が得意なキノじいだった。  
超人だなと苦笑しながら言う。

「そうだよ。他にてがかりもないし。入るほか無いだろ。」

ピーチ姫をこれ以上心配させたくない。そりゃ、俺が入ったとなれば心配するかもしれないけど

心配するな。おれはスーパー・マリオであり、なんどもピンチを経験して、そして逃げ切ったんだ。

今回も何とかなる。おれはそう思っている。

だから、キノじいもルイーヅも姫も俺を信じてほしいんだ。」

キノじいは黙ってこの言葉を聞いていた。そして、深々と礼をする。

「わかりました。なにとぞご無事に帰ってくる事を祈っております。」

「

マリオもうなずくと大きくジャンプして、土管の中に入っていく。  
キノじいは中を見る。

既に土管の中は闇しか無かった。

「マリオ殿……………」

つぶやくが、返事は帰っては来ない。

キノじいはまた深く礼をすると、屋敷へ足を進めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3499m/>

---

The・マリオ&カービィ ~協力プレイ~

2010年10月9日12時59分発行